



家庭の中の人権

カラフル

Colorful

このビデオについて

「人権問題」というと、難解で、政治や法律や一部の組織に関わる人だけに関係があるものだと思われがちです。しかし、「人権」の問題は、「人間」の問題。私たち1人ひとりが生きていく日々の中に存在します。気づかずにいると、知らず知らずのうちに他者の人権を侵害してしまうこともあります。そして人権に対する意識の基盤は、家庭の中で育まれていきます。

このビデオでは、両親と人生の巣立ちの時を迎えた子どもたちの会話を通じて、家庭の中にある人権課題を取り上げました。1人ひとりが「人権」に対する意識と知識を高め、家庭内で話し合うきっかけとしてお役立てください。

収録 テーマ

- 他人の噂—誰もが知らず知らずの内に…
- 子どもの就職—名刺に格付け?
- 子どもの結婚—親の理想と価値観
- LGBT—“普通”という思いこみ
- 多様性を認めるカラフルな社会へ

上映時間31分 [C#2822]

DVD 66,000円(税抜) 字幕版収録

★研修やセミナーで使いやすい!
解説書&ワークシートを収録

企画・制作：東映株式会社

監督：越坂康史

脚本：山上梨香

LGBT監修：特定非営利活動法人
虹色ダイバーシティ



予告編配信中!

<http://www.toei.co.jp/edu/>

教育映像

検索



東映株式会社 教育映像部

〒104-8108 東京都中央区銀座3-2-17

<http://www.toei.co.jp/edu/>



ふくざわ さとし
福沢 聡 (54) 福沢家の大黒柱
(演: 五代 高之)

本作の主人公。商社に勤めるエリートサラリーマンも、家に帰れば、就活中の娘や脱サラ後アルバイト生活続ける息子について悩むどこにでもいる父親。



ふくざわ かずま
福沢 一馬 (25) バーで働く長男
(演: 吉岡 圭介)

有名大学から大手企業に就職したものの、すぐに辞めてしまい、現在はバーでアルバイトをしている。



どい ことね
土井 琴音 (21) 愛美の幼馴染
(演: 吉田 亜子)

結婚の報告もあり久しぶりに福沢家に遊びに来た愛美の親友。子供の頃は知的障害のある弟と共に、一馬や愛美とよく遊んでいた。



ふくざわ ゆうこ
福沢 優子 (51) 子どもたちを愛する母親
(演: 杉山 みどり)

聡の妻。息子の一馬を案ずるがあまり余計なおせっかいをしてしまう。ある出来事をきっかけに、子どもに自らの理想や価値観を押し付けていたことに気づく。



ふくざわ めぐみ
福沢 愛美 (21) 就活中の長女
(演: 今中 菜津美)

合コンを兼ねたOB訪問をするなどイマドキな大学3年生。一馬の事もあり、自身の職業観に悩みながらも就活に励んでいる。



よもぎだ まいこ
蓬田 麻衣子 (32) 聡の元部下
(演: 大久保 千晴)

聡の推薦もあり、若くして女性向け新事業のリーダーに抜擢された。性同一性障害であることを聡に打ち明ける。

あ ら す じ

主人公、福沢聡は大手商社に勤めながら、妻の優子と、2人の子供と共に暮らしている。一見順風満帆な生活を送っている聡の最近の気持ちは、就職後すぐに会社を辞めてしまい、再就職しようともせず、フリーターを続けている息子・一馬のこと。また就活中の娘・愛美も社会や人間に対する考え方がまだ未熟で、端から見ていると危なっかしい。



ある日の休日、いつまでアルバイトを続けるのか問う聡に、一馬は今のバーの仕事が向いており、将来的にはバーテンダーを目指すと答えた。それを聞いた聡は、たかが水商売のアルバイト、もっと真剣に考えろと激昂するが、珍しく一馬は声を荒げて自分の決意が本気である事を伝える。「俺、いい会社に入って、いい給料をもらっても、幸せだって思えなかった。そういう人間もいるんだよ。」

そういう人間もいる・・・その言葉は、聡の元部下の蓬田麻衣子が発した言葉と同じだった。先日、麻衣子の女性向け新規プロジェクトのリーダー就任祝いの席で、聡は麻衣子から自身が性同一性障害であることから、このプロジェクトを降りるべきではないかと相談されていた。「どうしても、この身体や性別に馴染めない。そういう人間もいるんです。」性同一性障害について知識もない聡は、適切なアドバイスを麻衣子にする事ができなかった。



それ以来、心の落ち着かない日々を送る聡。しかし、翌日自宅に遊びに来た愛美の幼馴染の琴音から、自分が知らなかった一馬の一面を聞いた聡は、「大切な事は他人がどう見るかではなく、自分がどう生きるか」人間が一生を送る上で大切な考え方を再認識する。そんな聡に、妻の優子も語りかける「いろんな人がいた方がカラフルでいいじゃない」会社も社会も多様な人間で成り立つ事を知った二人は改めて、息子ときちんと向き合う事を決意するのだった。

2014年作品 p.